
英理の目線の先に.....。

さばら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英理の目線の先に……………。

【Nコード】

N0417A

【作者名】

さばら

【あらすじ】

英理さんがふと目線を変えたときのことです。そこには、一人の帽子を被った女が歩いていました。あの表情から、只者ではなさそうです。

私は妃英理、法曹界のクイーンと呼ばれる敏腕弁護士である。
現在、夫毛利小五郎と娘蘭を残して別居生活を送っている。

あの人にもすっかりしてもらわないと……。

蘭が心配するわけがよくわかるわ。

ところで最近、私の目線に見知らぬ女が現れるの。

一体誰……？

ある金曜日の夕方、私は事務所を出て秘書の栗山緑とアーケード街を歩いていた。

英理「さすが金曜の夕方ね。サラリーマンも思いつきり羽伸ばししているわね。私も少しは、パーッとやりたいわ。」

栗山「私も同感です、先生。机に向ってばかりでは疲れますよね。」

英理「来週からまた忙しくなるわ。また戻って書類処理をやらないと……。あの人が酔っ払って絡まないといいんだけど。」

栗山「そんなに無理しないで下さい。」

英理「だってノロノロしてたら遅れるでしょ。」

栗山「先生、もうすぐ（信号が）青になりますよ。」

横断歩道を渡ろうとして私が目を右に向けたとき、一人の女が私を睨みつけた。

ベルモット「……………（睨）！！」

英理「……………（怯）！！」

栗山「どうしましたか、先生？」

英理「べ、別に気にしないでいいわよ。目線が一致ただけよ。」

栗山「……………（私にはそうは思えないのに……………）」

ベルモット「……………（あの眼鏡をかけた女が“法曹界のクイーン”と呼ばれる弁護士妃英理ね。私と対決して勝てるのかしら？でも、私の秘密はそう簡単にわからないわよ。）」

英理「あの女は只者ではないわ。勝つのに梃子搦りそうね。」

栗山「先生、早く行きませんか？」

英理「でも信号が変わりそうだから、遠回りしましょう。」

栗山「は・はい。」

ベルモット「今日は、行きつけのバーの近くも賑わいそうだわ。通りがかりの人に目を付けられないよう注意しないと。」

あの女は、終始私の行動が気になったらしい。

2週間後の日曜の昼、私は蘭と小五郎の2人とコーヒーショップで休息を取っていた。

この日は、家族連れやカップルで大いに賑わっていた。

蘭はまだいいけど、あの人ったらちゃんとした格好をしてないんだから……。

英理「ふー！！ショッピングした後にコーヒーを飲むと落ち着くわね。」

小五郎「本当に疲れたぜ。こんなにデパートを歩き回ったのは久しぶりだよ。」

蘭「お父さん。とても真面目に付き合っていたように思えなかったわ。」

英理「あなたは昔から代わらないわね。少しは女性の買い物をわかつてよ。私達は楽しんでいるのよ。」

蘭「これじゃ、新一と同じね。」

小五郎「こら！！2人で俺を責めるな！！それに、探偵ボウズと一緒にするんじゃない！！」

蘭「（これだと夫婦喧嘩は永遠に終わりそうもないわ。）」

英理「ちよつと失礼するわ。私、ちよつと席外すから。」

小五郎「よし、待っているぞ。」

私が席を外そうとしたとき、あの女が店に入った。

店員A「いらっしやいますせ！！」

ベルモット「……………（睨）！！」

英理「……………（怯）！！」

蘭「どうしたの、お母さん？」

英理「蘭が気にすること無いわ。私が気になったのよ。」

小五郎「そ・そうか？もしかしたら、犯罪組織と関係あるんじゃないのか？」

英理「必ずしもそうとは言えないわよ。」

ベルモット「……………（今日は毛利小五郎と娘と一緒にね。あの娘には見覚えがあるわ。そう、工藤新一と一緒に歩いていたわね。この店は私が1人で行ったカフェにそっくりね。）」

店員B「お席は奥でよろしいでしょうか？」

ベルモット「構わないわ。」

英理「……………（もしかしたらあの女、長居する気じゃないかしら？）」

ベルモット「……………（3人の目を気にしないでゆっくりしようかしら？）」

あの女は、私達が出るまで何事もなかったかのような表情を浮かべていた。

ある土曜の夕方、私は新しいシャツを買おうと前の台にある洋服店に入った。

この日は、偶然目に留まった広告にあった特売品が目当てだった。

英理「……………（それにしても込んでいるわね。今日はあの服が目玉ね。まあ、仕方が無いか。）」

蘭「お母さん！！」

園子「おばさま、こっちよ！！」

英理「蘭、園子ちゃん！！どうしてここに？」

園子「実はね、隣のクラスの娘が行って口コミになったの。それで、蘭も一緒に行こうとなったわけ。でも、蘭は乗る気じゃ無かった。」
蘭「それはすぐに考えが纏まらなかったからよ。」

英理「いいわね。私も友達同士の会話が切欠で駆けつけたことがあったわ。あれっ 私の目当てのシャツが残り少ないわね。ロコミ通りの店ね。」

蘭「これなら、お母さんを引き立ててくれそうよ。」

英理「照れるわ、蘭。あの人はどんな反応見せるかしら？」

蘭「さあ。お父さんは、服装や髪の変化にあまり気付いてくれなかったから。」

園子「まあ、その点は新一君と同じね。」

私達が楽しく会話していたとき、またあの女が現れた。

ベルモット「……………（睨）！！」

英理「……………（怯）！！」

蘭「お母さん、大丈夫？」

園子「おば様！！あの女性は、この間パーティー会場の前にもいたわよ。」

英理「本当に？」

ベルモット「（おや、今日は娘とその友達と一緒にだね。しかも、お嬢様が相手とね。）」

英理「……………（あの女もバーゲンの服を狙っているんじゃないのかしら？パーティーによく来るとは、変装の名人みたいね。）」
私には、あの女と表情と行動を見る毎に正体がわかってきた。

学校が夏休みに入ったある日、私が入ったレストランには蘭と和葉ちゃんがいた。

英理「調度いいわ。この店で休むことにしようと。」

店員C「いらつしゃいませ！！」

蘭「お母さん！！今日は、和葉ちゃんも一緒なの。」

英理「蘭！！」

和葉「あんたが蘭ちゃんのお母さん？ほんならあたしと蘭ちゃんにそこに座らへん？」

英理「ありがとう。蘭、いいお友達を持ったわね。」

蘭「和葉ちゃん、実はね……（和葉の耳で囁く）。」

和葉「えっ！！ほんま？蘭ちゃんのお母さんが法曹界のクイーンなやんで。」

英理「よく世間が私をクイーンと駆り立てるけど、私は人が見るほど目が鋭くないわよ。」

和葉「誰もお見通しや。おばちゃんの勘は、平次よりずっと上やん。突拍子も無い行動と無関係そうやし。」

英理「照れるわ、和葉ちゃん。そう言えば、関西の高校生探偵は来てないの？それより、私にしつこく近づいてくる人がいるの。」

蘭「嫌だー！！またなの？」

和葉「もし、おばちゃんに手出したら、あたしがしばいてやるから！！あつ（驚）！！あつちから来よった！！」

和葉ちゃんの予感どおり、あの女がまた通り掛った。

今度は、ピンク色の口紅をしていた。

ベルモット「……………（睨）！！」

英理「……………（怯）！！」

ベルモット「……………（今日はまた別の女と一緒にだわ。どうやら……………娘の友達みたいね。口紅は、私より濃い目ね。）」

和葉「おばちゃん、どないしたん？」

英理「驚くことじゃないわ。彼女も休みたかったのよ。」

店員D「いらつしやいませ！！お煙草お吸いになりますか？」

ベルモット「ええ。」

店員D「でしたら、奥から3番目の席へどうぞ。」

英理「さっきの出来事が無かったかのような表情を浮かべているわ。」

蘭「お母さんが無事だといいんだけど。あれっ！！コナン君と服部君だわ。」

コナン「入るぞー！！（でも、あの女がいるぞ。）」

平次「ああ!!」

店員D「いらつしやいませ!!」

ベルモット「……………（工藤新一と服部平次が入ったわ。ただじやおかないわよ。）」

平次「和葉、ここにおったんか？ 捜しとったで!! 毛利の姉ちゃんと弁護士のおばちゃんも一緒か？」

コナン「蘭姉ちゃん!!」

和葉「平次、コナン君に何しとったんの？ あたらしらを心配させたんは、あんた達やん!!」

平次「アホ!! 日野さんが死ぬが死なへんかの瀬戸際やったんや!! 俺とボウズの力で助かったんや!!」

英理「相変わらず、無謀で危険な探偵ゴッコをしているのね。いい加減にしないと女性を悲しませるわよ。」

蘭「お母さんの言うことがよくわかるわ。」

コナン「……………（おばさん。あんたら言われたかねえよ。）」

平次「初めて知ったわ。法曹界のクイーンが毛利の姉ちゃんのおかnyったなんて。」

英理「悪いわね、平次君。今まで、あなた達の前で蘭の母と名乗ったことが無かったのよ。」

ベルモット「……………（服部平次と遠山和葉ね。また1人ターゲットを見つけたわ。）」

8月中旬の夕方、私は十河浜のファミリーレストランに立ち寄った。店員E「いらつしやいませ!!」

コナン「……………（また来たか!!）」

阿笠「おっ!! 英理さん!!」

哀「よくいらしたわね、法曹界のクイーン。」

元太「弁護士のおばちゃん、こつち来たらどうだ？」

光彦「英理さん、僕達と一緒にどうですか？」

歩美「おばさん、こつちはとても楽しいわよ。」

英理「みんな、ありがとう。」

その声の主は、阿笠博士と少年探偵団だった。

それを聞いて、私を歓迎してくれているように思え嬉しかった。

英理「子供達に囲まれて賑やかな場所に來られてよかったわ。私は夜になると1人ぼっちで寂しいのよ。」

元太「そりゃ、おばちゃんは毛利のおっちゃんとは別居状態だもんな。」

光彦「元太君、少しは言う場面を考えて下さいよ。」

哀「小嶋君。言われた人の身になってごらんなさい。」

英理「もしお困りの旦那さん・同僚がいたら、私の相談するといいわね。」

コナン「……………（心配だよな。フッフー!!）」

阿笠「わしにもよく理解できる。探偵団が出来る前までは、夜何も食べずに寝たこともあったぞ。」

英理「みんなのお陰で、気分が楽になったわ。」

コナン「それじゃ、注文しようか？」

コナン君がメニューに目をやったとき、またあの女が店に入った。

ベルモット「……………（睨）!!」

英理「……………（怯）!!」

歩美「おばさん、どうしたの？」

阿笠「英理さん、あの女に見覚えあるじゃないかのう？」

ベルモット「……………（今日はさらに子供が多いわね。それに、メガネの研究者と組織を裏切ったシェリーもいるわ。）」

英理「博士と哀ちゃんを真剣な表情で見ていたわ。只者ではなさそうね。」

私が店の奥に目をやると、1人の野球帽を被った男がいた。

英理「間違いないわ。あの男は賽銭泥棒だわ。」

コナン「そうだね、おばさん。」

阿笠「わしが電話を入れよう。」

大竹「（やべっ！！気付かれたか？逃げ場無いな。）」

英理「ちよっと、いいですか？あなた、米花神社から賽銭を盗んだわね。」

大竹「げっ！！俺はやってない！！」

コナン「いいや、あんたがやった証拠ならあるよ。小銭が妙に多いね。現場でカードを落としていたよね、大竹俊二さん。」

大竹「ううっっ！！」

英理「この場所にあなたの名前が書かれたカードが書かれていた上、今履いている靴と足跡がピタリと一致したのよ。」

大竹「す・すまん。俺がやった！！全部で30件起こしたんだよ。」

ベルモット「（あの男、組織を脱走した奴に似ているわ。）」

店には、通報を受けた都甲署の黒石刑事が入ってきた。

黒石「大竹俊二だな。」

大竹「は・はい。」

黒石「窃盗の疑いで逮捕する。」

阿笠「英理さん中々やるのう。」

英理「表情と動作を見て怪しいと思わない？罪を背負っている姿を絶対に見られたくないのよ。特に私のような勘の鋭い人の前ではね。」

光彦「英理さん、よく見抜きましたね。」

元太「コナン、おばちゃんを見習えよ。」

歩美「おばさん、しっかり人の心を見ているわね。私を見習いたいわ。」

英理「そんなに私を褒めないでよ。」

コナン「……………（これじゃ、俺は迷探偵か？）」

ベルモット「……………（フ・フ・フ（笑）！！毛利小五郎には勝てても、妃英理には勝てそうもないわ。）」

9月中旬の朝、突然私の電話がなった。

その日、私は徹夜で担当事件の書類を整理していた。

電話「プルプルプル!!」

英理「ふぁゝ!!こんな朝に何のよ!」

私はとても眠く起き上がるのも大変だった。

英理「もしもし、妃法律相談事務所です。」

有希子「英理!!お久しぶりね。何も話せなくてごめんね。」

英理「おはよう、有希子。どうかしたの?」

有希子「実はね、また優作と喧嘩しちゃったの。疲れているのに無理難題を押し付けて酷いのよ。また日本に行きたくなくなっちゃった。

だから、そのときはよろしく。」

英理「よくわかるわ。私だって無茶なことを押し付けられるのは日常的なことよ。……。だったら、ショッピングと映画に行かない? 帰りに(レストラン) Cherry Rose によりましょうよ。」

有希子「楽しみだわ。私も行きたかった所なのよ。」

英理「じゃあ、再来週の日曜でどう?」

有希子「いいわ。日曜ね。」

英理「また、あの女が現れなければいいのにね。」

2週間後の日曜、私は約束の時間になっても来ない有希子をずっと待っていた。

英理「相変わらず遅いわね。もうすぐ約束の時間になるのに。」

有希子「英理!!遅れてごめんね!!」

英理「おはよう、有希子!!別にいいのよ。」

有希子「それなら、デパートに入りましょう。新作の化粧水と口紅が出たのよ。」

英理「今から楽しみだわ。この後は、シャツを見ましょう。」

私達がデパートに入ろうとしたとき、またあの女が現れた。

ベルモット「……………(睨)!!」

英理「……………(怯)!!」

有希子「どうしたの、英理？あれっ！！」

英理「変に目を向けちゃだめよ。きつと何かを起こすわよ。」

ベルモット「……………」（ついに法曹界のクイーンと闇の男爵夫人がお揃いだわ。ボスに何と言おうかしら？）

あちこち店内を歩き回っていると、CMで見た店が見えてきた。

有希子「英理！！あつちよ！！」

店員F「いらっしやいませ！！」

有希子「わゝゝ、いい香りね。」

英理「これなら一生若さが保たれるわ。」

店員F「発売されたばかりなのですが、人気があつてお早めでないと売り切れます。ご婦人方をやり一層引き立てますよ。」

有希子「いいわゝゝ！！優作は間違いなく絶賛するわ。」

英理「気付いてくれるだけで羨ましいわ。でも、あの人ったら……………」

有希子「よくわかるわ。小五郎君ってウチの新一同様にファッションや化粧品にあまり関心を向けないのね。」

英理「少しは、私の興味のある所をわかつて欲しいわ。」

私が有希子と店員と話している間に、売り場へあの女が入ってきた。ベルモット「……………」（睨）！！」

英理「……………」（怯）！！」

店員F「お客様、どうかなさいましたか？」

英理「お気遣いありがとうございます。でも、大丈夫よ。」

ベルモット「……………」（化粧水は、私の拘っている物よ。あの2人に負けられないわ。）

有希子「昔からずっと私への憧れを抱いているようだわ。」

英理「昔から……………？」

有希子「英理が気にすることじゃないわ。何でも無いわよ。」

英理「……………」（いや、間違いなく有希子の秘密を握っているわ。）

店員F「いらつしゃいませ!!」

ベルモット「ちよつといいかしら? 私もこの化粧水を試したいの。」
店員F「よろしいですよ。」

あの女は、終始目当ての化粧水を使っていた。

私達はファッションフロアに入り、一着のワンピースに目が留まった。

店員G「いらつしゃいませ!!」

それは、以前蘭がパーティーで着た物に似ていた。

英理「あれっ!! 蘭が着たのに似ているわ。」

有希子「可愛い!! パーティーで輝きを放ちたいわ。それに、真由ちゃんが持っていていそうね。」

英理「真由ちゃん...? もしかして、蘭にそっくりな娘こと? 髪型以外は似ていたのを憶えているわ。お母さんもそっくりだったわね。」

有希子「性格も蘭ちゃんそのものよ。『私は末っ子なのに弟と妹がいるようで嬉しい。』の一言はよくわかるわ。今ではまるで本当のお姉さんみたいなの。」

英理「姉、姉と言うけど、私は一番上だったら余り甘えられなかったわ。兄・姉がいればよかったわ。」

私がふと視線を外すと、あの女が歩いていた。

ベルモット「... (睨)!!」

英理「... (怯)!!」

店員G「お客様、どうかなさいましたか?」

英理「心配しないでいいわよ。偶然、目に留まっただけでしょね。」

ベルモット「... (組織の服装には疲れたわ。たまには、ワンピースもいいわね。)」

有希子「しっかりと(ワンピースを)見ていること。」

英理「やっぱり目が鋭いわね。」

夕方5時半、私達はレストラン「Cherry Rose」へと向った。

有希子「今日もたくさん買っちゃった。」

英理「これなら、男性が一杯振り向きそうね。」

有希子「レストランの雰囲気が目には浮かんで来そうだね。お洒落な店内、綺麗な花とお皿、見た目の美しい料理、そしてワインにシャンパン、想像するだけでロマンチックだね。」

英理「あら、これじゃ「Lucia」の一場面ね。女性の理想の店でよかったわ。今度は、落ち着いて楽しみましょう。」

歩くこと12分、私達は予約を入れていた「Cherry Rose」に着いた。

店内は、既に予約客で一杯だった。

英理「素敵なお店ね。」

店員H「いらっしやいます！6番のお席へどうぞ。」

英理「6番は、お花がある前だね。」

有希子「素敵ね。もうお姫様だね。」

英理「有希子、落ち着いてね。」

有希子「いいわー！！女優に戻った気分！！優作にも薦めたいわ。」

英理「有希子、既にマリア・デルーチだね。彼女も、お花とワインが似合うのよね。」

有希子「やだー！！英理ったらー！！「Lucia」の世界に入っているのね。」

そのとき、あの女が1人の男を連れて席に向った。

ベルモット「……………（睨）！！」

英理「……………（怯）！！」

ソムリエ「お客様どうかなさいましたか？」

英理「いいえ。気にしなくてもいいわよ。」

ベルモット「……（ワイン・シャンパンと私は切っても切り離せない関係。2人の女には負けられないわ。）」

ソムリエ「それでは、ワインをお選び下さい。」

店員H「いらっしやいませ！！2名様で？」

ベルモット「ええ。」

英理「あの女は、このワインを飲みそうだわ。」

ソムリエ「……（何て勘の鋭いお客様なんだ。）」

ヌーボー「どのワインにする？」

ベルモット「私は、こっちにするわ。」

有希子「英理、勘が鋭いわね。」

私達がメインディッシュに入ろうとしていたとき、2人の男が店の外にいた。

それは、小五郎と優作さんだった。

小五郎「おおー！！綺麗な人が多いなー！！」

優作「静かにして。無駄なことに目が行ったら怪しまれるよ。」

ベルモット「……（探偵の毛利小五郎と作家の工藤優作ね。夫人が気になって目を留めてるわ。）」

小五郎「何だ！！英理と有希ちゃんがいるぞ！！」

優作「外へ出るのを待とう。」

そして、私達が店を出たとき。

英理・有希子「あなた！！」

有希子「小五郎君、犯人を追ってたの？」

小五郎「英理！！それに有希ちゃんも一緒か！！」

優作「突然、姿を消すもんだから追ってきたんだ。いくら隠しても俺にはお見通しだよ。」

英理「あの女がいると、「ワインレッドのショッカー」かしら？」

優作「英理さん、よく気付いたね。シャロン・ビンヤードがどこか

にいそだね。」

有希子「まさか!!」

ベルモット「……………(睨)!!」

英理・有希子「……………(怯)!!」

ベルモット「……………(私が女優だと言いたいのか？簡単に決め付けないでよ。)」

小五郎「どうしたんだ、英理、有希ちゃん？誰かが変装しているんじゃないのか？」

英理「見破るのが難しいわね。あの女の顔は100%以上ね。」

10月上旬、私は人質立てこもり犯田端明の弁護人を務めていた。

検事席には九条検事、裁判長は大岡判事によって進められていた。九条「以上のように、鑑定は信用性に欠ける物であります。」

英理「意義あり!!」

大岡「弁護士!!」

ベルモット「……………(睨)!!」

英理「……………(怯)!!」

なんと、あの女が傍聴席正面にいた。

ベルモット「……………(鑑定は私には効かないのよね。今回は、相当梃子摺るんじゃないかしら。)」

大岡「弁護士!!」

英理「鑑定は客観的かつ明瞭に進められたのであり、被告人のために変えられた形跡はありません。」

ベルモット「……………(評判は100%本当のようね。私にはぐうの一言も出ないわ。)」

英理「……………(私もいつかあんたの正体を見抜いて見せるわよ。)」

あの女の正体を見破るのは難しくても、心を読むことはできた。私を見て、心が丸くなったに違いない。

優しい元の姿に戻ることを願う。

- 完 -

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0417a/>

英理の目線の先に.....。

2010年10月30日05時44分発行